

阿刀田高の



T-O-B-E 小説工房

毎号の課題に挑戦しているうちに、
自然と小説を書く力がつく、そんな
掌編小説の誌上コンテスト。
選考委員の阿刀田高先生を唸らせる
力作をお待ちしています。

第32回 最優秀賞

かけおちの日

畠田ゆりか

【第32回課題】 切符

阿刀田高(あとうだ・たかし)
78年『冷蔵庫より愛をこめて』でデビュー。79年『来訪者』で日本推理作家協会賞受賞。短編集『ナポレオン狂』で第81回直木賞受賞。95年『新トロイア物語』で吉川英治文学賞受賞。ほか、『旧約聖書を知っていますか』『知的創造の作法』『アンブラッセ』など著書多数。

選評

阿刀田高

切符……。昨今ではチケットと言う
ほうが多いのではあるまいか。

劇場やスタジアムの入場券、あるいは商品や特別な品を手に入れるための予約券、その名の通り小さな紙片を指す言葉だが、やはり多いのは……まず第一に思い浮かぶのは鉄道の乗車券だろう。応募作も当然のことながら圧倒的にこれが繁く見られた。ほとんどの場合、小さな紙切れだが、鉄道のチケットには、その向こうに旅がある。

——どんな旅かな——
よい旅なのか、わるい旅なのか。とにかく今ある状況からべつなところへと移っていくのだ。ロマンを感じやすい。

私の場合について言えば、鉄道の切符は、

——うれしい——
のである。ホッとするのである。

古い話だが、昭和二十年代、鉄道の切符は入手がむづかしかった。地方から東京への旅には、長い時間並んでようやく買うのが普通だった。父に命じられて買いに行ったら、自分の旅などは減多になかった。苦勞して手に取ったときは、本当にうれしかった。やがて指定席なども出まわり、これはさらにうれしい。楽々と、なんの心配もなく旅の方便が確保されるのである。ホッとしてしまう。

この癖がすっかり身についてしまいいまでも指定席の切符を見るときは、

——これで安心——
今でも一瞬、安らぐ。

閑話休題。最優秀作には『かけおち

待ち合わせの時間は近づいている。私は財布から水色の切符を取り出してながめた。

ひかり470号、東京行き。

待っているからな、とシゲルは私をまっすぐに見つめて切符を寄越した。かけおちつてやつだ、と片目をつむってみせた。おととい、ドトールでコーヒーを飲みながら。切符には、タバコの匂いが染み付いている。

私がシゲルに会うと、お母さんはいい顔をしない。シゲルは私に悪影響を与えると信じている。

確かにシゲルは、だらしなくて約束をあんまり守らないし、ヘビースモーカーだし、おまけに、いくらかは教えてくれないけど借金まである。でも、私はシゲルを嫌いになれなかった。

シゲルはいつだって自由で生き生きとしていて、私の知らない世界をたくさん見せてくれる。愛している、とシゲルは何度も私に言う。ミクがいると、俺はまともに生きられる気がするんだ、と。

今日は土曜日で、お母さんは朝からパートに出かけている。そうと家を出て、新幹線に乗ってしまうことも今ならできる。

財布、ハンカチ、必要最低限の荷物をリュックに詰め

ていく。このまま私がいなくなってしまうたら、お母さんは心配するだろう。泣くかもしれない。でも、もしかしたらせいせいするかもしれない、とも思う。

最近、お母さんとはケンカばかりだ。おとといも、シゲルと会ったことがバレてケンカになった。

「どうして、こそこそするのよ。そんなに会いたいなら、うちに連れてきて、うちで会いなさい」

そんなの、シゲルは絶対嫌がるに決まっている。お母さんだって、いざ連れてきたら連れてきたで、説教を始めてろくに話もできないだろう。

リュックを背負う。書き置きをするか迷ったが、何もせずに玄関の鍵をかけた。

駅まで歩いていく途中に、お母さんのパート先があるクリーニング屋さんばわらず。ガラス張りの扉の向こうで、お母さんはお客さんに笑顔を見せながらビニールのかかったワイシャツを渡していた。罪悪感に胸がきゅうつと締め付けられ、見つからないうちに、うつむいて足早に通り過ぎる。

駅から電車に乗って、三つ先が新幹線の駅だ。約束の時間の五分前に着くと、シゲルはすでに来ていて、改札の前でジャンパーのポケットに手をつ突っ込んで立っている。

第32回 入選者

【最優秀賞】

「かけおちの日」 畠田ゆりか

【佳作】

「手紙」 いたうりん

「ソフトクリーム溶けた」 朝霧おと

「片思い発両思い行き」 家田智代

「切符を失くした男」 伊瀬由孝

「月とベープ・ルース」 えもとえい

「ミライ予測」 小野多加江

「消された駅」 常盤英孝

応募総数 229 編

応募要項

【第35回課題】

風花 締切：11/30（消印有効）

【第36回課題】

星 締切：12/1～12/31（消印有効）

【規定枚数】

400字詰換算5枚厳守。ワープロ原稿可。

【応募方法】 郵送の場合は原稿のほか、コピー1部を同封（WEBやメールの場合はコピー原稿不要）。作品には表紙をつけ、タイトルと氏名を記入。別紙に〒住所、氏名（ペンネームの場合は本名も）、年齢、職業、電話番号、メールアドレス（ある人）を明記し、原稿と一緒にホチキスで右肩を綴じる。ノンプルをふる。コピー原稿には別紙を添えない。表紙と別紙は規定枚数外。A4用紙を横に使用し、縦書き。作品は折らない。返却は不可。未発表作品に限る。応募者には弊社から公募に関する情報をお知らせする場合があります。

【応募条件】 応募作品の著作権は応募者に帰属しますが、入選作品の発表および第2次使用については公募ガイド社が優先する。

【選考委員】 阿刀田高

【発表】

第35回・3月号誌上／第36回・4月号誌上

【賞】 最優秀賞各1編＝3万円（商品券）

佳作7編＝記念品

選外佳作10編＝WEB掲載

【応募先】 〒105-8475（住所不要）

公募ガイド編集部

「第〇回 TO-BE 小説工房」係

【メール】 tobe@koubo.co.jp（件名「第〇回小説工房」／件名のないものは無効）

【URL】 <https://www.koubo.co.jp/tobe/>

mottomo 会員限定☆公募ポイント☆

mottomo 会員の方は、応募者全員＝10p
応募するだけで自動的にポイントが貯まります。
最優秀賞＝100p追加
佳作＝50p追加
選外佳作＝30p追加
詳細はP.138を参照！

た。足元には、大きな黒いボストンバッグが一つ転がっている。
「私の姿を見つけると、大げさに手を広げてよく来た。ミク、愛している」
と叫ぶから、恥ずかしかった。
「ちょうどいいな、さあ行こう」
時計に目をやり、シゲルがボストンバッグを持って歩き出す。
「ちがうの」
私はシゲルのジャンパーの裾をつかんだ。
「一緒には行けない」
私が言うと、シゲルはぼかんと小さく口を開けて固まった。
「それを言うために来たの」
「なんでだ。俺といると楽しいって言ってたじゃないか。東京はにぎやかで、もつと楽しいぞ」
「シゲルには、新しい家族がいるでしょ。でも、お母さんには私しかいないから。やっぱ、私はお母さんと暮らすよ」
もらった切符を返すと、シゲルはゆつくりとまばたきをしてそれを受け取った。

「ミク、いくつになったんだ」
「十四だよ」
「そうか」
シゲルは切符を指先でそうと撫でて、目を細めた。
「いつでも、東京に遊びにおいで。待っているから」
シゲルが私を片手で包むようにして抱きしめる。タバコの匂いがする。それから何も言わずに改札をくぐり、振り返らずに消えた。
家に帰ったら、シゲルに会ったとお母さんに言おう。素足に、冷たい秋の風が吹き抜ける。お母さんはたぶんまた怒るだろう。でも、ちゃんと話そう。私はまたシゲルに会いたい。
娘の年も知らない勝手な父親だけど、私はシゲルを嫌になれなかった。

「の」を選んだ。ここにはいま述べた状況が（それとよく似たものが）提示されている。今日とはちがう明日への飛躍、その第一歩として渡された一枚の切符……。文章もかけおちの直前を伝えて、つきづきしい。かけおちの相手のシゲルは、私のお母さんと仲がわるい……。へんな男で、読者としては、私、このミクの行く末が心配だ。そして「ミク、いくつになったんだ」「十四だよ」
——わっか——
ますます心配になる。これが第一のシヨック。そして最後は……第二のシヨックが待っている。全貌が見えてくる。少しあざといが、シヨートシヨートらしくて、すばらしい。
次点には『手紙』を選んだ。地方から東京に出て、貧しい生活を送りながら女優を夢見ているヒロイン。母からの手紙は帰郷を促して、その切符代が入っている。後日ヒロインは……。月並なストーリーだが、筆致が切実で、よい、と思った。